



孤高の女騎士が憧れのお姫様と
Hしちゃう方法をTS的に考えてみた

○scene 1：欲望との邂逅

若葉が生い茂り、木々を揺らすそよ風も優しい季節。
農民は麦を刈り入れ、木こりは山にいそいそと出かけ、狩猟者は山から下りてきた獲物たちを狙う。

ここ、ファルキア王国は、広大な平野と多くの入り江で形成された海岸線を持つ、温暖で豊かな国家だ。

現在の王であるタリアヴィーニ七世は、先代に続き賢人であり、内向きには税を緩め貿易を発展させ、外向きには屈強な騎士団を抱え絶えず隣国に睨みを利かせ、この肥沃な大地を更に発展させていた。

民もまた、皆顔色に陰はなく、笑顔で日々の労働に従事していた。

これは、そんな平和な国で起こった、ちょっとした変事。

世が治世だからこそ、このような出来事が変事として記されているのかもしれないが。

…：そう。時を遡ること、二年ほど。

これは私、クラウディア・トゥリヴェントが、姫の近衛隊長に就任した時の話。

女性だけで構成された、姫直属の近衛兵。その長であった私に起きた、異変の話だ。

その日の朝、私は夢の中で、とある声を聞いた。

「年齢十九の私が、未だ聞いたことのないような、妖艶な女の声を。」

「フーン、貴方がお姫様の、新しい玩具なのネ」

それは、騎士である私に対して、無礼極まる一言だった。

「なるホド。これはひよつとしたら、ひよつとするカモ。お姫様も、ヤツト大願成就の日を迎えることができるカモ」

辺り一面霧がかっていて、手を伸ばすと自分の指先すら見えない。

そんな夢の中なのに、何故か鼻がひくんと反応する。

肺が受け止めたのは、白桃を砂糖で煮詰めた時のような、胸やけしそうな程甘い匂い。

「婦女子の中には、このような香りを瓶に詰め、好んで身体に吹きかける人もいる。」

けど、騎士の私は、香水など縁のないものだし、当然ベッドに匂いもついていない。

「少シ、様子を見ようカナ。貴方に適正があるかドウカ、判断する時間が欲しいノ。ダツテそうしないト、お姫様は満足しないカラ」

彼女はそんな一言を残して、夢の底へと消えていった。

慣れない香りに、遮られた視界。鼻腔から入る空気の甘ったるさが、思考を乱す。私は最後までその姿を捉えることはできなかった。

◇

国境近くに広がる雑木林に、十騎ほどの屈強な馬の蹄の音が静かに鳴り響く。

太陽が天の頂から外れ、少し傾いた頃。私と、私の部下であるファルキア王国第四親衛隊は、小規模ながらも隊列を組み、林道を進んでいた。

性別というもので大別するならば、馬上にあるものは皆女性だ。

揃いの鎧に身を包み、それぞれ自らの獲物である刀剣を佩く。

かこ、かこ、という馬の歩みに合わせるように、軽金属でできた鎧のつなぎ目がかちやかちやと小気味よい音を発している。

我らの任務は、唯一つ。

今、隊列の中央に身を置いてある貴人を、お護りすること。

「はあく、退屈だったわ。向こうの晩餐会って、格調高いだけで中身がないんだもの」

その貴人が、一際毛並みの揃った馬の上でため息をつく。

「わたしに外交させるのもいいんだけど、だったらそれなりのご褒美が欲しいわ。隣国にまともな男って誰一人いないし、オジサマたちは頭の固い人たちがばかりだし」

馬上の御人は、鞍に横向きに乗る、言わばお姫様座りで、手綱を緩く持ち馬を御している。

我らからすれば、器用と言いたくなる乗馬法。ただ、いくらお咎めしても、馬車をお使いくださいと進言しても、彼女はぷいっと首を横に向けるだけ。

「マウラ姫、またそのようなことを。ファルキア王国第一王女たるお方が、品のない発言ばかりされては困ります」

「くすくすっ。クラウディア、またお説教？」

「いえ、私はただ、私を感じたことを申し上げたまでです」

ドレスの裾を軽くなびかせている、マウラ姫。

彼女こそ、我ら親衛隊がお守りするマウラ・タリアヴィーニ第一王女だ。

純白のロングドレスに身を包み、いつも豊かな笑みをたたえ、下々の者にも気を配る、国内で絶対の人気を誇る姫様。

引き締まった腰回りに、大きくたおやかな胸。外套に身を包んでいる今はわかりづらいが、その肉体は自然と女性であることを誇張している。

美しさの象徴である、肩まで伸びた金髪のウェーブヘアは、木漏れ日に反射してきらきらと輝いていた。

「あゝあ、わたしを満足させてくれる殿方が、どこかにいないものかしら」

「姫、言葉が過ぎますよ」

「過ぎないわよ？ 私は王の血筋を引く女ですもの、嫁ぐなら最高の男の元に嫁がなきゃ。そのためには、いい男を漁って漁って、漁り尽くさないとね♪」

「……今度は、下品です、姫」

「もう、そうやって水を差して！ クラウディアはいつもお堅いんだから。もつと柔軟に生きないと、人生損するわよ？」

「構いません。姫にお仕えするという私の願望が叶った今、失うものはありませんから」

「……ふう、その忠誠心はすつごくありがたいんだけど。けど、そういうのが続くとわたしの肩こりがひどくなるっていうか」

その肩こりの原因は、ストレスでなくその丰满な肢体にあるとは思う。と、思わずこぼれそうになった口を、すんでのところで塞ぐ。

事実、身長も、胸囲も、臀部のしなやかさ、引き締まった腰も、全てにおいて私は姫に負けている。

唯一持つているのは、親衛隊長にまで登り詰めた剣の技のみだ。

「まあまあ、姫も愚痴をお抑えくださいませ。クラウも悪気があって言っているわけではありませんので」

姫が話すその奥から、おしゃべりに参戦してくる人物がいた。

この隊の中で、姫様に自ら話しかけられる人物は、私の他に一人しかいない。

副隊長のカレン・フルラン。騎士団の経歴では先輩にあたる存在だ。馬上で柔らかかに構える彼女は、長身の背をすらりと伸ばし、肩下まで伸びた髪を手前で結わき、前に垂れ流している。

私と同郷で、幼馴染みの関係と言ってもよいカレンは、こういう時にしばしばマウラ姫と私の間に入ってくれる。

「クラウも、それくらいにしておいたら？　小言が過ぎるとお姫様に嫌われるわよ」

私をクラウと愛称で呼ぶのは、カレンだけ。

自分が騎士の称号を受け、第四親衛隊に所属が決まった時、彼女がいて本当にほっとした。

口べたで決して人付き合いの得意でない私を、隊に馴染ませてくれたのはカレンだった。

はじめて姫に謁見した時も、傍らにいて緊張をほぐしてくれたことも記憶に新しい。

私にとって、カレンは公私にわたり、かけがえのない友人だ。

「しかし、カレン。私は……」

「わかっているわ。お国のため、第一王女たる自覚をお持ちになってください、と言うんでしょ？」

「……それは、そうだが」

「けど、おしとやかで品行方正、全ての女性の憧れとなる女性。外交では可憐な花として国の象徴となり、内政では人心を捉え万民に幸福を与える御人……全てを姫様一人に背負わせるのは、同じ女性である私たちの目から見ても、酷じやないかしら」

この通り、カレンは自分より弁が立つし、頭の切れもいい。

だからよりいっそう、姫様には私が堅物に感じられるのかもしれない。

「さっすがカレン。わかってるう」

「……姫様も、譲歩なさるところは譲歩なさって欲しいんですけどね」

「ふうん、例えば？」

「馬術をご披露なさるのは結構なことですが、ここは国境に近い場所。

野盗の類が身を潜めているやもしれませんので」

「くすっ、大丈夫よ。その為に、クラウディアをはじめとした皆がいるんだから♪」

姫はそうやって、私にウイंकをしてくる。

実のところ、同姓であっても、このつかみ所のない茶目っ気と可憐さは、気を抜いていると惚れてしまいそうになる。

これも、王家の血筋というものなんだろうか。

姫はわがままといえる性格の中にも気品を持ち、お守りしたくなる雰囲気を自然と醸し出している。



「そういえば、この道ってどこか似てるわね」
私の顔を見据えたまま、姫が言葉を続ける。

「似ている、とは、どこにですか？」

「くすっ、わからない？ 貴方とわたしが最初に出会った場所よ」

「え……？」

自分の頬が、かあっと赤くなるのがわかった。

まさか姫が、そんなことを覚えていてくれたなんて。

私をはじめ、そのお姿を拝見したのは、今から5年ほど前だった。

私の故郷も、大別すれば田舎の部類に入る。今通っている林のような景色に囲まれた狩猟と牧畜で生計を立てる村だった。

そんな寂れた場所に、マウラ姫がいらっしやった。

旅の途中に立ち寄られた姫は、二刻ほど村で足をお休めになられた。

けれど、姫のことなど知らなかった私は、いつものように狩猟に出かけ、兎を追うのに夢中だった記憶がある。

そして、木々の間を抜け、小さな池のある開けた場所に出たとき。

私は、清らかな水に浸り、一糸まとわぬ姿で水浴びをされている姫と出会ったんだ。

…：煌びやかだった。美しかった。自分より年下の子なのに、叫び声一つ上げずに凜として立っていた。

こんなに清麗とした女性がいるなんて、その時まで知らなかった。泥にまみれ、獣を追う自分とは何もかもが違っていた。

その後、出会った女の子がマウラ姫だと知った私は、これを天命だと悟った。

先に騎士見習いとして鍛錬に励んでいたカレンと歩を合わせ、姫に仕える身としてひたすら剣の腕を磨いた。

そんな私が、第四親衛隊の隊長に大抜擢されたのが、一ヶ月前の出来事。

姫様やカレンに理由を尋ねても、ただ『頑張つて』としか返ってこなかった。

しかし、戸惑っている暇はどこにもなく、それ以降こうして毎日、姫様の護衛を務める日々が続いている。

私の夢は、ここに実を結んでいた。

…：無論、親密にお付き合いする程、姫のおてんばぶりを垣間見ることになり、軽くショックを感じているところではあるけれど。

しかし今、私が充足していることに変わりはない。

「…：っ？」

——物思いにふけていた脳に、耳から入ってきた音が警鐘を鳴らす。

「え？ クラウ、どうしたの？」

「しっ…：カレン、静かに」

林道が続く中、ちよつとした丘の頂上にさしかかろうとした時だった。穏やかな風の中なのに、地にあるすすきの葉が不自然に揺れた。

兎や猿の類ではない。よく目を凝らすと、落ち葉と野芝で形作られている道を横切るようにして、不自然な影が伸びている。

「…：カレン、馬を止めろ。緩やかに、しかし素早くだ」

「…：了解」

カレンに目配せをし、臨戦態勢を取らせる。

耳を研ぎ澄まし音をかき集め、肌を風に慣らして周囲の気配を悟る。

…：草むらに隠れているのは、およそ七、八人といったところか。

「クラウディア、何事なの？」

異変を感じ取ったマウラ姫が、不安そうな声を上げる。

「姫、そのまま隊の中央を離れぬよう願います」

私は、常時と変わらぬ顔で、姫に語りかけた。

否、このような相手であれば常時と変わりはない。

野盗どもは、影に隠れ槍と長縄で馬を畏にかけ、我らを襲うつもりだったのだろう。

ただ、私がいる限り、そんな安い畏は通用しない。

「カレン、前方だ。不逞の輩がいる、わかるな？」

「……ええ。馬で突撃をかけるのは自殺行為ね」

私は一人、馬を下りる。

そのまま前へ、一步。賊を威圧するように、正面からにじり寄る。

剣の鞘が鎧に当たり、チキ、と鳴った。

「隊を二つに分けるぞ。半分は姫の護衛、もう半分はカレンと共に右翼の敵を一掃しろ」

「右翼ね、わかったわ。けど、クラウは？」

「言っただろう。皆が動くのは、私が合図を送った後だ！」

「っ！クラウ、無茶よ！」

カレンの制止を聞く前に、身体が跳躍していた。

目指すは、左前方に身を潜める不逞の輩。

薄汚れた小蠅のような賊どもから、見目麗しいマウラ姫を護る。この瞬間のために、私は生きているのだから。

「っ……おおおおおおおおお！」

小柄な私が剣で他人を圧倒するには、速度を極めるしかなかった。

その為には、第一に敵と見なした相手の懐に、勢いよく踏み込むこと。

五歩、六歩、七歩。敵まであと三步に迫ったところで、剣の柄に手をかける。

すすきの束に向かって踏み込み、愛用である幅広の剣を抜き、右足を軸にして最初の一撃を見舞う。

「ぎゃあっ！！」

肉を抉る音と感触と共に、品のない悲鳴が上がる。

血に濡れた芝の上で、恐らくは畏であっただろう長縄が賊の手から解け、支えを失って垂れ下がった。

「今だ！マウラ、挟撃するぞ！」

「……っ、もう！いつも強引なんだから！」

畏が無くなったことを確認して、本体を突入させる。

策が破れた今、野盗たちに勝ち目は無い。ある者は私の剣の錆となり、ある者は命惜しさにこの場から逃げ去っていった。

「ふん、呆気ないものだ。我らを狙ったのが運の尽きだったな」

剣についた賊たちの血を拭いながら、隊へと戻る。

切り込んでから一分足らずで、林道は静寂を取り戻していた。

「マウラ姫、ご無事で」

「ええ。かすり傷一つどころか、さざ波一つ感じなかったわ。さすがは神速と名高いクラウディアの剣ね」

「勿体ないお言葉、恐れ入ります」

賊の死体が転がり、泥のような色の血が土に染みこみ始めている中、マウラ姫は眉をひそめることもなく、いつも通りの口ぶりだった。

「くすつ、退屈だった旅が嘘みたい。今のはスリルがあったわ。クラウディアの勇士が見られるのなら、たまに野盗に襲われるのもいいものね」

「姫、お戯れを。万が一のことがあったら、いかがなさるおつもりですか」

「あら、万が一の確率を那由多の果てへ追いやるのが、貴方の役目ですよ？」

「それは、そうですが……」

相当に肝が太いのか、それとも私を本当に信頼してくれているのか。姫の笑顔は、このような時にも変わりなくて。

「……クラウディア、近くにいらっしゃい」

「……は？」

「いいから、こちらに」

と、姫が下馬をして、私のほうへと歩いてくる。

近くに、と言われたが、これでは私が迫られている格好だ。

「大変。泥と返り血で、顔がこんなに汚れているわ」

「え……？ あ、っ……」

頬に、柔らかい感触が乗る。

その正体は、姫がポケットから取り出した、絹のハンカチーフだった。

「動かないでね、クラウディア」

「ひ、姫、およろください。せっかくのハンカチが汚れてしまいます」

「そんなことはどうでもいいの。貴方の端正な顔が汚れるほうが、よっぽど大ごとよ」

ぺたぺた、ぺたぺた。

姫の細い指が触れるたび、ぴりりと小さなパルスが走る。

温かくて、こそばゆくて。

しなやかな指先の動きに得も言われぬ幸福感を覚え、ふと我を忘れそうになる。

「っ……姫、もう結構です。汚れは落ちましたから」

「ふふっ、まだよ。クラウディアの照れた顔、わたしにもっと見せて？」

「ひ、姫！」

……近い。あこがれのその人との距離が、零に等しい。

私の気持ちを知ってか知らずか。

姫は面白半分といった風に、真っ赤になった私の顔をくすぐり尽くして……。

「くすぐすつ。姫、それくらいにしてあげてください。クラウの顔が、別の意味で真っ赤になってしまいます」

そして、全く私の擁護になっていない制止の声が、幼馴染みから上がる。

「カレン！ お、お前まで！」

「だって、仕方ないじゃない。まるで恋する美少年みたいに頬を染めているのは貴方なんだもの。賊に単身切り込んでいった人と同一人物だとは、とても思えないわ」

カレンの言葉を皮切りに、隊員からも小さな笑いが起こる。

「あら、それはいい表現ね。いつそクラウディアが男の子だったらよかったのに」

「っ、それでは私は、第四親衛隊にいられません！」

「ふふふふつ、やあね、冗談よ。けど、貴方なら隣国の馬の骨なんかよりも、ずつとずつと凛々しくて素敵だわ」

「姫……！」

小さな笑いが、次第に隊員たちの爆笑の渦を生んでいく。

笑顔が生じることは平和な証拠でもあるけど、私とその犠牲になるのはあまり納得がいかない。

「では、クラウディアをからかうのもこれくらいにしておきましょうか」

「姫……最初から、そのつもりだったんですね」

「ふふつ。先程、お説教されたお返しよ」

……姫には、かなわない。

私は、隊長になってから、それを何度痛感したことか。

「さ、旅路を急ぎましょう。日が沈むまでに、城に帰りたいわ」

「……はっ」

未だ夕陽のごとく赤みがさしている顔を伏せて、私は馬上に戻る。

頬に添えられた姫の指の感触を思い出すたび、その色は深みを増していった。



その後は有事もなく、夕刻に無事城に着く。

姫は長旅の汗と垢を落とすため、すぐに自室へと向かっていった。

「ふう……！」

備え付けの木の椅子に腰掛け、私は深く息を吐いた。
親衛隊の厩舎に愛馬を繋ぎ、甲冑を脱ぐ。

金属のそれを脱げば、麻でできた上下の下着のみ。

下穿きも靴下も、汗を吸い尽くして重くなっていた。

「クラウ、お疲れ様」

「……ああ。カレンも」

副隊長は、一足先に騎士の正装へと着替えていた。

型の整ったシャツに、姫ほどではないが腰回りを引き締める役目のベスト。

若葉色のズボンは、膝下丈で裾がきゅつと締まっている。

深緋色に染め上げられた外衣が、姫の直属に相応しい気品を持った一品だ。

「はい。長旅で疲れているでしょう」

「すまない。頂くよ」

カレンが、両手に持つ質素なグラスの片方を差し出してくる。

私はそれを受け取り、すぐに口をつけ、中に注がれていたはちみつ入りのレモネードを一気に飲み干した。

「ん……んっ……っぶは……！ さすがに美味しいな、ファルキア産のレモンは」

「そんなに慌てて飲んで……しかも下着姿でなんて、はしたないわよ」

「構わないさ、ここには女しくないんだ」

「それでも、よ。ここも城の中なんだから、身だしなみはきちんとしておかないと」

この頃……特に、同じ第四親衛隊の隊員となつてから、カレンは私にお節介を焼くことが多い。

内容は、決まって女らしくしろ、という方向だった。

「やれやれ、今度は私に、カレンがお説教か」

「貴方のためを思っているのよ、クラウ。例えばこの場に、姫がねぎらいのお言葉を掛けるためにいらしたとしたら？」

「っ！？ ひ、姫が？」

慌てて直立不動の姿勢を取り、金色の御髪をたたえた姿を探す。

半分ほど残っていたレモネードのグラスが床に落ちて、こん、と音を立たした。

「……ぷっ、くすくすっ」

「……？ う……カレン、謀ったな」

「あははっ、クラウの慌てっぷりったら、ものすごいわね。本当に姫様を愛しているかのよう」

また、頬が赤くなる。

今日は、こんな展開の連続だ。

「ち、違うぞ、カレン。私はただ、あのお方をお守りしたいだけだ」

「はいはい、わかっています。副隊長として、私も同感よ」

「ぼつが悪くなつて縮こまる私に、カレンは笑みを返してくる。

私が持つ姫への想いは、多分彼女には筒抜けなんだろう。

ただ、それはあくまで、敬拝と思慕の情といったものなんだが。

「そ、そういえば、その姫様は？ この後の公務はないと聞いているが、仮に晩餐会に出られることがあれば、私も警護に……」

「大丈夫よ、その必要はないわ」

「え？」

「外国にお出かけになった日の姫はね、夜はいつもお部屋の中で一人……そ、その、ゆっくりとお休みになるの」

隊長となつて日が浅い私より、カレンのほうが姫のことをよく知っている。

少し、焼きもちに近い感情が湧きかけるが、私はそれを心の底に押し込んだ。

「だから、第四親衛隊の今日の任務もこれでおしまい。明日以降に備えて、私たちも早めに寝ましょう」

「……姫は、そんなにお疲れになつているのか？」

「心配しなくていいわ。夜の警護は、きちんと宿直がついているもの」

「しかし……」

「クラウ、貴方の悪い癖よ。姫様に没頭するあまり、周りのことが見えなくなつたり、無茶をしたり」

「ずい、とカレンが身を乗り出して、私の顔をのぞき込んでくる。

私のほうが身長が低い分、同い年であるにも関わらず、カレンは時にお姉さんのような仕草を取ってくる。

「今日だつて、そうだったじゃない。一人で賊を相手にするような真似をして、もし怪我でもしたらどうするつもりだったの？」

「そう易々と、下手は打たないよ」

「貴方の腕は、私もわかつているわ。けど、それでも心配なものは心配なの」

「やんちゃな妹に言い聞かせるようにして、カレンが言葉を続ける。

「昼夜問わず、姫様の側を離れたくないのもわかるわ。でもね、他の人もちゃんと信じて、夜のことは任せて」

「……カレン……？」

「遠征帰りなのに、夜も姫様のお相手だなんて……貴方が無理をしすぎ
て倒れでもしたら、私は悲しくなるわ」

純粹に、カレンは心配してくれているんだろう。

確かに私は、昼の林道でもらった姫の温もりに、少々浮かれていたの
かもしれない。

「いい？ 今晩は、姫様のお部屋を訪ねたりしないようにね」

「……わかったよ。今日はおとなしく、休むことにする」

ここで我を通したら、それこそ我が儘というものだ。

カレンの気を揉ませないためにも、自分の欲を抑えておくことにする。

一刻もしないうちに、日が沈む。

私も湯浴みをし、自室に戻る。

廊下からふと見えた夜空には、充ち満ちとした満月が煌々と輝いてい
た。

——そして、明かりを消し、床につこうと目を閉じた時。

何故か、閉じた目蓋の内側に、薄黄色いもやがかかる感じを受けた。

……いや、確実に視界は閉ざしている。私は何も見えないはずだ。

けど、次に嗅覚が、何故か敏感に働いてしまう。

……この匂い、覚えがある。

ジャムを作る時のような、砂糖で果物を煮詰める時の甘ったるい匂い
が。

「クスクスっ。『お姫様』ガ、気になるノかしラ？」

次は、聴覚。

どこのものでもない、天井の更に裏から響いてくるようなその声は、
どんな砂糖よりも甘く、胸焼けがしそうになる程の女の声。

「ダッタラ、行ってごらんヨ。はちみつより甘くて、レモンよりも刺激
的なモノが、見られるカモ」

その声は、私を誘う。

皆が寝静まった夜に、姫の元へ急げと、私をいざなう。

……刺激的とは、なんだ。

この声は、いったい私に何を言おうとしているのか。

わからない。わからないが故に、確かめたくなる。

こうなってしまうっては、寝付けるものも寝付けない。

「……っ……こ、これは仕方がないことなんだ。だからカレンも納得し
てくれるはずだ」

独りごちながら、私は寢所から身を起こす。

「先程の声が物の怪の類であれば、姫の身に危険が及ぶやもしれぬ。だから私が確かめに行く、それだけなのだから」

理由つけて、身だしなみを整える。

カレンとの約束を破ることはなるが、姫のことのほうが心配だ。

……いや、心配、という言葉が全て当てはまる訳ではない。

私の心には、その時確実に好奇心というものが芽生えていたのだから。

「？ クラウディア隊長、こんな時間にどうなされたのです？」

姫の部屋の前に行くと、夜の警護を務める隊員が扉の前に立っていた。

「ご苦労。カレンにお前を呼んでこいと言われてね」

「隊長に……ですか？」

「はは、カレンも人使いが荒いものでね。扉番は私が代わるから、行つてきなさい」

「……はっ。では、失礼します」

我ながら、よく舌が回ったものだと思う。

嘘をつくという行為は、多分生まれてはじめてのことだったから。

「……っ……」

私は今、マウラ姫の部屋の前にいる。

廊下に灯った蠟燭の明かりが、床に敷かれた赤の絨毯を黒緋色に染めている。

今日は、じわりと汗をかくような、寝苦しい夜だった。

……そして、私の鼻に、またあの香りが忍び込んでくる。

「まただ……また、果物の甘い香りが……」

いけないとは、思っている。

ただ、指先が止まらない。

こっそりと、音を立てないように。

私は、姫の部屋の扉を押し、指二本分ほどの隙間を作った。

「……っ、ふ……あ、あ、あは……っ」

心の臓が体内で脈動する音、そして自身の息づかい。

それ以外の音が、微かに耳に届く。

部屋の中は廊下にも増して薄暗く、目が慣れるのに時間がかかる。

「……姫……？」

そろり、そろり。

これではまるで、問者と同じだ。

けれども、一度生まれた好奇心は、ただただ膨らむばかりで。

「ひう……！ くふ、ふう、んううう……っ」

間違いない。この声の主は、マウラ姫その人だ。私が聞き違える訳がない。

ただ、このようにくぐもって、しかも苦しそうに喉を震わせている姫を、私は今まで見たこともないし、聞いたこともなくて。

「あ、あふあつ、どうしたのかしら、わたし、今日は一段と濡れて……ん、んんうっ」

濡れている？ 何が？

耳を澄まし、目を凝らして、私はひたすら部屋の中の様子を窺う。

未だに知ることのなかった、夜の姫のお姿。それに興味がないとは言えない。

「はー、はー……んくううっ、ひ、あ、ああああ……っ」

……けど、だけど。

姫の声は、苦しさを増すばかり。

これはもしかして、本当にあの甘ったるい声を持つ物の怪の仕業か。だとすると、私がお助けしなければいけない。姫の部屋に乗り込んで、物の怪の正体を掴まなければ……。

「ふあ、あつ、んんう！ す、すごい……すごい……っ、気持ち、いい……っ」

「っ！？」

すつと立ち上がり、突入を図ろうと身構えた私の耳に、信じられない言葉が飛び込んでくる。

……凄。気持ちいい。

いったい、何が。姫は何をしているんだ？

「はあ、はあ、ひあ、あうう！ クリトリス、こんなにぶっくり……あ、あはあっ！」

徐々に、視線が慣れてくる。

部屋の奥、天蓋付きの寝床の上で、姫はうつ伏せになっているらしい。つた。

ただ、荒々しい息づかいは依然として続いている。

その声の強弱は、姫の指先の動きに連動しているようにも見えた。

「っ、くふ、あふ、ふああ……！ こ、こんなに濡れていたら、下着までべとべとになって……っ、脱いだほうが、いいのかしら……」

ごそごそと、ベッドシートが擦れる音。

そして、姫の身を包んでいた下着が、姫自身の指によって抜き取られる音。

それらが、やけに臨場感を持って私の三半規管を揺さぶってくる。

事実、あれだけ様々な音が鳴り響いていた室内は、今は静寂が訪れている。

あの『甘い香り』が、微かに漂うだけだ。

……だけだった、けど。

「……ふふっ」

「ッ!？」

私の、目の錯覚かもしれない。

暗がりの中で、そんなことまではつきりと目蓋に映る捉えられるわけもない。

けど、姫と視線が合った、そんな気がした。

——そして、艶やかに濡れた姫の瞳は、私にこう言っていた。

『そんなところで何をしているの?』と。

「う……うあ、あ……!」

多分私は、見てはいけないものを見てしまったんだろう。

これは、姫の秘め事だ。誰にも見せることのない秘め事だ。

そんな秘密を覗いてしまった罪悪感、そして昼とは全く違う姫の姿を垣間見てしまった背徳感、その二つが私の心に突き刺さる。

「クラウディア隊長、ただいま戻りました」

「ひっ!？」

いきなり、背後から声を掛けられる。

その主は、先程護衛の任を交代した隊員だった。

「ご、ごほん。ご苦労、こちらは異常なしだ」

「了解です。しかし、副隊長の部屋を訪ねましたが、私に用事などないとのことで……」

「う、うむ? そうか、私の勘違いだったかな」

「隊長、しつかりしてください。夢でも見たんじゃないですか?」

……そうか。これは夢か。

あんなに妖艶な姫の姿など、現実にあるはずがない。

ならば、全ては夢幻か。それならば合点がいく。

「すまなかつたな。では、引き続き警護を頼むぞ」

「……はっ」

扉番に気付かれないよう、そっと、姫の部屋の扉を閉める。

そして私は、足早に自分の部屋へと戻った。

ただ、一度目に焼き付いたものは、簡単に剥がれることはなかった。

頭の中では、姫の甘い声がいっまでも響き渡っている。

呼吸が、苦しい。身体が熱い。

床についても、何故か下腹部がじいんと痺れたまま収まらない。
鼻には、甘い香り。そして、耳にはあの女の幻聴。
…結局、その晩は満足に眠ることすらままならなかった。

「ふふ、そういうコト。アナタはキモチイイコトを、なーんにも知らないのネ。ダッタラ、欲望そのものヲ植え付けてあげル。お姫様も、喜んでくれると思うナ。くすくすくすつ、うふふフフフ」

私は、夢うつつの世界で、その女の声を聞いた。

誰ともわからない、存在すらあやふやな、その女の声を。

「あ、ナルホド。自己紹介、まだだったネ。私はフェデリカ。ミンナのキモチイイって顔がだ〜い好きな、サキュバスのフェデリカ」

サキュバス…それは、伝記に残る、淫魔…？

「ソウ、今後ともヨロシク♪　そしてアナタも、今から淫らナ生物の仲間入りネ…♪」

○scene 2：初体験、そして

ようやくくついた浅い眠りをあざ笑うかのように、夜が明ける。
蒸し暑く、寝苦しい夜だった。

びっしょりと汗をかいた全身が、相当にだるい。

「っ……ふぁ、あ……」

大きく、あくびを一つ。ただ、そうしたところで節々に力が入るわけでもない。

流行風邪にでもかかったかのように、全身が微熱を持っているような感覚だ。

ただ、そうも言ってはいられない。私は第四親衛隊隊長であり、マウラ姫を護衛する任を持っているのだから。

「……ん？　なんだ、これは」

気だるげに、寝返りを打った時だった。

下腹部の上に何か硬いものが当たり、ごろんといくはずの下半身がつかえる。

寝ぼけて、短刀の鞘でも抱えて寝たか。それにしては、どこか人肌のような温もりがあつて……。

当然のことながら、その素性を確かめようと、私は下穿きをめくつた。

「ッ！？　な……な……！！？」

ただ、そこには。

……あるはずのない肉の棒が、私の股の間に繋がっていた。

いや、そこから生えているという表現のほうがいいか。更に、棒というよりは、激しく脈打つ肉の塊と言った方がいかもしれない。

私の記憶が確かならば、これは男性についているものだ。

しかし、ここまで大きなものは見たことがない。幼い頃に見た近所の男の子のものは、それこそ小さなものが垂れ下がっていたはずだ。

それ以外に、私の身体に変化がないかどうか、確かめてみる。

声は、さほど変わりはない。元々、姫やカレンに比べれば低いほうだったのもあるのかもしれないが。

そして、胸も。膨らみなど、無きに等しかったから。

けれど、私の股の間にはそれがついている。肌色と言うにはどす黒い竿が息づいている。たった一つのその変化が、決定的すぎる。

……そうだ。これではまるで。

私が、男になったみたいではないか……！

「っ……？　だ、誰だ」
と、その時。

こん、こんと二回、部屋の扉が丁寧に叩かれる。
「クラウ、起きてる？」

扉の向こうにいるのは、カレンだった。

朝の報告に来たか、あるいは昨晚私がついた嘘で、深夜に起こされたことを抗議しに来たのか。

いずれにせよ、状況は最悪だ。こんな変わり果てた姿を、見られるわけにはいかない。

ただ、どうすればいい。扉に鍵など掛かっていないし、応対しなければ怪しまれる。

何より私には、姫の護衛という使命がある。隊長としての任務は絶対だ。

そうこう考えを巡らせている間に、もう一度ノックの音がする。

「クラウ、時間よ。入るわよ」

「あ、ああ。わかつている」

寝坊を疑う声に、反射的に答えてしまう。

私は急いでシーツを手繰り寄せ、無造作に腰へと巻いた。

鉄製の蝶番が微かに軋み、ドアが開く。

「あら、珍しい。目を覚ましているクラウが、布団の中から出られないだなんて」

開口一番、カレンはきよとんとした顔でちよつとした嫌味を言ってきた。

「……悪い。今日は何故か、寝起きが悪くて」

「大丈夫？　なんだか、血が足りないような顔をしているわよ」

「それは、あんなものを見たら……いい、いや、何でもない」

自分で言うっておきながら、あんなものとは何だろうと自問する。

果たして、現在股間から生えてしまっているそのることか。あるいは
昨晚体験した、姫の乱れるさまのことか。

「で、何だ。私なら、すぐ支度を調べて向かうぞ」

「それは、そうしてくれるとありがたいけど」

どうやら、一言では済まないらしい。

やはり、嘘をついたことがばれているのか。

「……すぐ、という割には、手と足が動いていないわね」

「うん？　いや、着替える姿など、みっともなくカレンに見せられないからな」

「何を今更恥ずかしがっているの。昔は一緒に、よく池で裸になって水浴びをした仲じゃない」

「いや、それとこれとは話が違……って、カレン？」

まごついていて私を、まどろっこしいと感じたのか。

おもむろに寝所へと近寄ってきたカレンが、ベッドシーツを引っ張ってくる。

「早く着替えたほうがいいわよ。汗を吸い込んだ服を着たままだと、風邪を引くから」

「い、いいと言っている。そのくらい、自分でする」

「だったら、早くなさいな。駄々をこねる子供じゃあるまいし」

「しかし……！ や、やめろ、布団を剥ぐな！」

やっていることは、みつともない力比べだ。

股間のこれを見られたくない一心で、私は懸命にシーツを身体へと手繰り寄せる。

私とカレンとの間で、シーツが伸びる。

……が、その時。

「っ！ う、うあ？」

その異物から、ちり、と刺激が走った。

シーツが、あるいは下着が、その肉塊の先端と擦れたのか。

瞬間に全身へと回った痺れは、カレンに抵抗する指先の力を確実に緩めた。

「隙ありよ、クラウ」

「うわ！！ ば、馬鹿、カレン……っ！！」

ばさ、と派手な音を立てて、シーツが翻る。

そして当然、私の下着姿は、カレンの目に晒されることになる。

慌てて両の手で下腹部を隠すが、その行為自体が既に怪しく、異物の存在を彼女に知らせることになった。

「……え……？ クラウ、それ……」

私を叱っていたカレンの表情が、訝しげなものに変わる。

それも、そのはずだ。ここに、いやマウラ姫を護衛する我ら第四親衛隊の空間に、これはあつてはいけないものなのだから。

「……っ……カレン、見るな……見ないで、くれ……」

自分の声が、ここまで弱く、そしてか細く感じたことは、今までなかった。

ただ、情けなく嘆願するその台詞を受けたはずのカレンが、私との距離を縮めてくる。

——私は、どうなるんだろう。

カレンに問い詰められたとして、私はどう申し開きをしたらいいんだろう。

幼馴染みに異性の疑惑を持たれ、蔑んだ目で見られるのか。

この身体の異変が公になり、男子禁制である第四親衛隊で、隊長が除隊の処分を受けるといふ事態になるのか。

……私は、姫のお側にいられなくなるのか。

そんなことが、次々と頭の中をぐるぐると回っていく。

「……クラウ」

哀れみをも含んだ響きで、カレンが私の名を呼ぶ。

対して私は、顔を上げることすらできなかつた。

ただ、それでもカレンは、私への問い掛けを続けてくる。

「これ、どうしたの？」

「……」

「黙っていたら、わからないわ。教えて、クラウ」

沈黙も、限界だった。

「……私にも、わからない。朝気付いたら、こうなっていたんだ」

言葉を、ひねり出す。あるがままを、カレンに伝える。

それ以上のことは言えない。私自身、理解できていないのだから。

「……これ、貴方についているはずのないものよね」

「ああ」

「まさか、クラウが男だったとか……ううん、そんなことないわよね。

昔からの付き合いだもの、裸なんていくらでも見た覚えがあるし」

「……よしてくれ、恥ずかしい」

カレンは、私を慰めてくれてるんだらうか。

ともすれば、悲鳴を上げて逃げ出してもおかしくない状況だったはず。なのに、私の幼馴染みは平静さを保ったまま、それをまじまじと見つめていた。

「で、どうするの？ もうすぐ朝の訓示の時間よ」

「おいおい、カレン。それは落ち着きすぎだろう」

「けどクラウ、貴方は入隊後一度も公務を休んだことがない、健康優良児を地でいくような人よ。そんな隊長が隊員の前に姿を現さないとなると、それだけで騒ぎになるわ」

「だが、こんな姿を衆目に晒すわけにも……」

そびえ立つそいつは、収まるとか、引つ込むとかいった気配を微塵も感じさせない。

この肉塊がそのままであれば、確実に服を押し上げ、そこに存在していることを主張してしまう。

かといつて、どうすればいいのか。
そんな知識は、私には皆無だった。

「……根元から、切るとか」

「ま、待ってくれ。これは恐らく、私の身体と一体化しているんだぞ」

「そ、そうよね。クラウについているものなのよね、これ。それなら……」

「……それなら、つて……カ、カレン、何か解決方法を知っているのか？」
藁にもすがる気持ちで、カレンに問う。

私の手は、思わずカレンの両腕を掴み、ゆさゆさと揺さぶっていた。

「そうね……知らないと言ったら、嘘になるわ。知識としてなら持っているもの」

「なら、すぐ実行に移してくれ。医療でも薬でも何でもいい、早く！」

「……わかったわ。私もはじめてだし、上手にできる保証はないけど、やってみるわ。けど……クラウ、何があっても驚かないでね」

「わ、私を誰だと思っている。姫直属の、親衛隊隊長だぞ。ちよつとやそつとのことで驚きなどしない」

「くすつ、そう？ なら、少しの間我慢してね」

この時、私はつきり、カレンが医者を呼んでくるものとばかり思っていた。

ただ、よく考えれば、第三者にこの身体を開示するということは、男の人の逸物をひけらかすということに繋がる訳で。

私たちにとつて、その選択肢があり得ないことは、容易に理解できるはずだった。

「……え？ うわ、カレン？」

寢床の上で、カレンが私を捕まえる。

正確には、私の腰に手をやり、やんわりと抱きしめてきた。

困惑をよそに、その指が、下着の上から問題の竿へと触れてくる。

「っ！？ ひ、ひあう！！」

……なんだ、これは。

先程の痺れと同じか、それ以上の刺激。

ぴりりとくる、痛みともけいれんともとれない不思議な感覚が、腰を駆け巡る。

「な、な……カレン、いったい何を……」

「驚かないで。多分、こうしないとイケないの」

「お、驚くだろう、これは。まだこの肉塊が何者なのかすら、定かではないのに」

「……いいえ、九分九厘男の人のそれに違いはないわ。そして大きくなっているのは、朝勃ちっという現象。寝ている間に、ペニスに血を吸って成長するものなの」

カレンは先程、びくびくと脈打っているこの物体について、それなりの知識を持っていると言った。

ただ、私の身体を襲った感覚は、今まで人生の中で感じたもののどれにも類するものが見当たらない。

「せ、成長、って……？」

「今みたいに、上を向いて硬くなっていることよ」

「それは、この妖しい感覚と何か関連があるのか？」

「妖しい、って？」

「おかしいんだ。先程その竿を握られたとき、寒気を感じた時のそれに近いものを背筋に感じた。しかもまるで風邪を引いた時のように、身体は熱を帯びている。けど……」

一度、そこで言葉を区切る。

今、身体に起こっている異変を、正直に話していいものか。私には、それがわからない。

「……けど？」

ただ、カレンは心配そうな、そしてどこか潤んだ瞳で、私の顔をのぞき込んできた。

優しく言葉を掛けられて、ふっと気が緩む。

「そこだけ、感覚がはつきりとしているんだ。うまく言えないが、肉の塊が、私自身に何かを訴えかけているような……」

初体験のことだから、仕方がない。しどろもどろになっているのは、自分でもわかる。

けど、カレンは目尻を下げて、そんな私に微笑みを投げかけてきてくれた。

「……そう。クラウド、感じてくれているのね」

「感じ、て……？ な、なんだそれは」

「今は深く考えなくていいの。クラウド、私に触られた時の感じって、嫌な感覚だった？」

「い、いや、そんなことはない」

「だったらそのまま……私の指を、感じて」

『この感覚を、そのままに感じる』

また、背筋にびりりと刺激が走る。それはカレンが、指先をしなせたと同時に湧き上がった感覚だった。

「あ、っぐ……！ カ、カレン……っ」

喉が、勝手に震える。

私自身が想定していない声が、幾度となく漏れてしまう。

それは、騎士たるものが出していい響きとは到底思えない、情けないもので。

「……クラウ、大丈夫よ」

私の心理を察してか、カレンが声を掛けてきてくれる。

ただ、耳元で囁かれた時、その吐息が耳たぶをふわりと撫で……。

「あはあ……っ！ や、やああっ！」

ぞわぞわと、新たな痺れが背筋に生じていく。

「はあ、はあ……いったい、どうなっているんだ……この肉棒は、この刺激は、私の身体をどうしようとしているんだ……」

カレンは緩やかに、その指で竿を撫でていた。

そう、撫でられているだけ。なのに身体の全神経が、その僅かな触れ合いに全力で反応していく。

「クラウ、少し恥ずかしいことだけど……一つ聞いていい？」

また、耳元。

これも微かな刺激なのに、ぞわりという感覚が思考を乱す。

「これまでに、女の身体で……えっちなこと、したことある？」

カレンが口にしたのは、普段であれば答える必要もない話。

騎士の道には関係が無く、私の中では戯れ言と認識する内容のもの。

……ただ、昨晩から続く変事が、私の脳を乱す。

「……そんな経験、あるわけがないだろう」

結果、私は馬鹿正直に、カレンの問いに答えてしまっていた。

「他の人に、抱かれたことは？」

「ぐ、愚問だ。そのような女が、親衛隊に入れる訳がない」

「なら、自分の胸を揉んでみたり、あそこに触ってみたこととかは？」

「こんな平らな胸に触れて、何が楽しいんだ」

自らの身体のことを訊かれ、体内に羞恥の心が芽生えるのがわかる。

私は既に、カレンの瞳を直視できなくなっていた。

そんな私に、またしても彼女は、優しく囁きかける。

「……そう。ならこれが、はじめての快感なのね」

——快感。

その単語が示す意味を、私は瞬時に判断できなかった。

ただ、それを合図に、カレンの指は、より大胆に肉棒の上を動き回るようになっていく。

「カ、カレン、やめ……あぐっ！？」

しゅ、しゅ、という衣擦れの音までしてきた時、その頭にぢりりという感覚が走る。

熱い炎で瞬時に炙られたような刺激は、今度こそ痛みに近いものだった。

「ご、ごめんなさい。クラウ、大丈夫？」

「はあ、はあ……こ、これが、大丈夫な、ものか……」

擦れた部分は、先端に付いていた割れ目のような部分。

触れた相手は、下着の腰回りを留めていた紐だった。

その様子を見て、カレンはつばを飲み込み、こくと喉を鳴らす。

「……やっぱり、下着越しじゃ、変に摩擦が起きて痛いのかしら」

「え？ それは、どういうことだ？」

「直に触らないと、いけないみたい。クラウ、脱がすわよ」

「っ！ ま、待ってくれ、カレン。それはいくらなんでも恥ずかしくて……」

「大丈夫よ、クラウ。見ているこっちも、どきどきしてるから」

それは微妙に理由になっていない、と指摘する前に、カレンの手が動く。

たいした抵抗が出来ないままに、私は下半身を露出させられていた。

「う……あ……ああ、カレン……っ」

寢床の端に座ったまま、私は真っ赤になった頬を隠すように、両手で覆っていた。

昨日までのように、私が女性であれば、例え全裸を見られてもここまで動揺はしなかっただろう。

しかし、今はそれがある。男性器が、天井に向かってそびえ立っている。

そして、私の隣に座しているカレンが、身を乗り出して肉棒を握ってきた。

「……やめろ、やめてくれ……恥ずかしくて、顔から火が出そうだ……」

「ごめんなさい。けど、やめるつもりはないわ。これはクラウのためなんだから」

カレンの指が、棒を握ったまま、上下に蠢く。

いや、握るといふより、包み込む、といった表現のほうが正しいかもしれない。

「……クラウ、最初に言っておくわ。これから何があっても、我慢しないこと」

「我慢、って……」

「今から、ここに溜まっている膿を出すの。そうすれば、このがちがちに固まった男性器も力を失って小さくなるの」

今になって、カレンの狙いが、それとなしに理解できるようになってきた。

「でも、きつとクラウにとって刺激が強すぎる。だから、我慢しないで、私に任せてって言ったの」

肉棒の構造を知っていると、カレンにとつてはじめてで、不慣れなはずの行為。

それでもカレンは、私のために、懸命に対処してくれている。

なら、私も、恥じらい、戸惑いといった感情を、なるべく抑えないといけない。

腰の周りに走る妖しい感覚も、我慢せずに全てありのままに受け止めなければ……。

「……それじゃ、本格的に扱いてみるわね」

「あ……カ、カレ……んうっ!? く、あ、あ、あはああっ！」

自分の中で、覚悟はできていたはずだった。

恥じらいながらも力を抜き、カレンに全てを委ねるはずだった。

その理性を超えたところで、男性器がおもむろに反応する。

輪を作ったカレンの指が、その肉竿を擦り上げた時のことだった。

「ひ、あ、あ……な、なんだ、今のは……」

引き金となったのは、多分カレンの親指だ。

緩やかに動く五指の中で、最も力を入れて、その腹で竿の裏側を押し

てきた。
何故そうなるのか、どうしてそこから快感が走るのか、わかりはしない。

ただ、一瞬で仰け反った背筋が、尋常でない刺激の量を物語っていた。

「ここで、いいのね。この筋張ったところを中心に、扱いていけば……」

自分の知識を確かめるように、カレンがつぶやく。

「ま、待って……カレン、説明してくれ。私は今、どうなっている？ 股

間に生えている男性器は、何のためにこのような痺れを私に与えている？」

私はもう、必死だった。

未知の感覚に襲われ、自分の身体が自分で制御できなくなる。

脳の神経が、全て焼き切れそうな程に強い電撃。それが、単純に怖い。

「……ここはね、クラウの身体の中に溜まった膿の……精液の通り道なの」

「通り、道……?」

「そう。だから、優しく刺激してあげるの。精液出る、たくさん出ろって扱いてあげるの。それが今の、私の役目……」

「あ、うあ、あああ！ カ、カレン、また……！」
カレンの指が、速さを増す。

指と怒張が触れ合い、くにくに、ぐにぐにと艶めかしい音を立てていく。

「はあ、はあ、あ、あぐ……だめだ……これって……こんなもの……！」

「クラウ、暴れないで。嫌な感覚じゃないはずよ。むしろ……」

「はあ、はあ……むしろ、何だと言うんだ……」

「……気持ちよく、ない？」

——キモチイイ。これが、キモチイイ？

こんな刺激をもらい続けたら、私はのたうちまわり、悶絶してしまうに違いない。

はつきり言って、中毒性までありそうな怪しき極まりない感覚なのに、カレンはそれを気持ちいいと肯定してくる。

到底、理解の外の出来事だ。まるで夢のような、幻のような感覚だ。

「はううっ、うあ、あくあ……！ カレン、カレン……っ」

それでも、私の股間で男性器が跳ね上がる。

竿の根元を感じる疼きは鮮明で、この快感が自らの身体に起きていることを証明している。

……そう。既に本能は、カレンの言葉を確実に理解していた。

この男性器が、ペニス自身が、気持ちいいと私に訴えかけてきていた。

「……クラウ、まだ出そうにない？」
「ま、また訳のわからないことを……出るかと問われても、主語が不在だ」

虚勢を張って、カレンの問いを突っぱねる。それでも、明らかに私の中で異変が起きていた。

絶え間なしに男性器から響く刺激のせいで、息はとことん荒くなり、指先一つ満足に動かせない。

なのに何故か、それが欲しくなる。もっと扱いて欲しいと、竿自身が言っている。

先程、カレンが言った。先端の小さな割れ目から、私の欲望が出るはずだ、と。

あるはずのない子種。生じるはずのない性欲の塊。それが、この私に蓄積されているとも言うのか。

「……うぐ、くうう……！ は、はあ、っ、ん、んん……ッ！」

己を否定したくて、その欲望を拒絶したくて、歯を食いしばる。

けれど、まるで私をあざ笑うかのように、新たな、そして強烈な刺激を、カレンが送り込んできた。

「……クラウ……ん、ペろ、れるう……っ」

「あはあ……っ！ くふ、ふやあうっ、カ、カレン、やめ……っひあああう！！」

触れたのは、舌尖。乗り移ったのは、僅かな量の唾液。

ただそれだけのことが、快感というものを倍に、いや、何倍にも膨れあがらせる。

手先のそれとは違う、生暖かくも柔らかい直接の感触。

竿を伝い、指先に絡んだ透明な露が、指先に絡んでにちにちと音を立て始める。



「んりゅ、くりゅ、くぶ、くぶぶ……っ、ちゆるるうっ、にゆるるるう……！！」

カレンは休む暇もなく、必死に先端を舐め上げてくる。

彼女の動作全てが、この男性器の為に機能していると言っている。

「ッ……！！ あ、ああ、や、やめ……もうやめてくれ、カレン……！！」

何かが、背筋を上がってくる。それも、かつてない速さで。

体験版はここまでです。

続きは頒布版にてお楽しみいただけます。

孤高の女騎士が憧れのお姫様と Hしちゃう方法をTS的に考えてみた

連絡先：<http://www.define.gr.jp/enter.html>

サークルブログ：<http://define001.blog89.fc2.com/>

※18歳未満の方は閲覧禁止です。ご注意ください。

本作の無断複写、複製、転載、web上への無断アップロードを禁じます。

この作品はフィクションであり、実在の人物、団体、事件などには一切関係ありません。

#define/ifdef 2011.12